

# ジオパーク活動を通じた 「島おこし」の取り組み

— 隠岐・西ノ島町の場合 —

戸井田 克己

## I はじめに—ジオパーク活動とは—

本稿では、島根県<sup>おき</sup>隠岐郡<sup>にし</sup>西ノ島町<sup>しま</sup>（図1）における「島おこし」<sup>1)</sup>の取り組みのうち、特にジオパーク活動との関連を中心に考察し、離島活性化のための方策の一端について検討する。

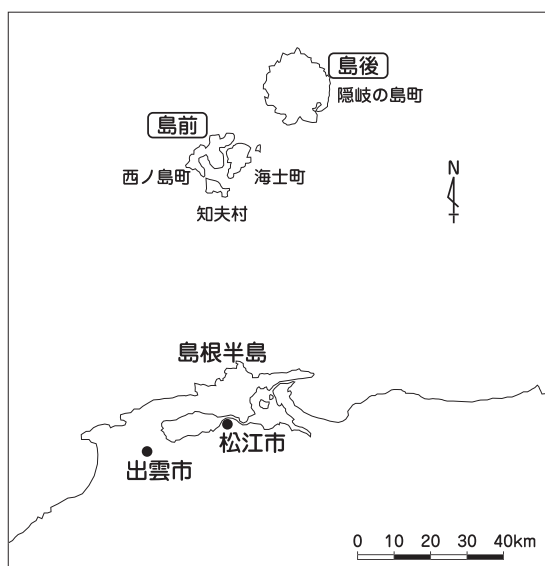


図1 隠岐諸島の位置と町村の配置

ジオパーク（geopark）とは、科学的に貴重な、あるいは景観として美しい地形や地質を生かした、いわば「大地の公園」のことである。ユネスコのガイドラインによれば、それは geoheritage、つまり地形・地質などの「大地の遺産」を保全するとともに、研究・教育・普及に活用し、さらにはジオツーリズムを通じて地域の持続可能な発展に活用することを目的としている<sup>2)</sup>。

また、日本ジオパーク委員会<sup>3)</sup>は、ジオパークを次のように説明している<sup>4)</sup>。

ジオパークは地球活動の遺産を主な見所とする自然の中の公園です。ジオパークは、ユネスコの支援により 2004 年に設立された世界ジオパークネットワークにより、世界各国で推進されています。ジオパークは、以下のように定められています。

- a. 地域の地史や地質現象がよくわかる地質遺産を多数含むだけでなく、考古学的・生態学的もしくは文化的な価値のあるサイトも含む、明瞭に境界を定められた地域である。
- b. 公的機関・地域社会ならびに民間団体によるしっかりした運営組織と運営・財政計画を持つ。
- c. ジオツーリズムなどを通じて、地域の持続可能な社会・経済発展を育成する。
- d. 博物館、自然観察路、ガイド付きツアーなどにより、地球科学や環境問題に関する教育・普及活動を行う。
- e. それぞれの地域の伝統と法に基づき地質遺産を確実に保護する。
- f. 世界的ネットワークの一員として、相互に情報交換を行い、会議に参加し、ネットワークを積極的に活性化させる。

こうしたジオパークにまつわる諸活動を総称して、本稿では「ジオパーク活動」と呼ぶことにする。ジオパーク活動とは、以上の定義や説明を総合して、次のように簡潔に再定義することができる。



写真1 隠岐の景観（島後）



写真2 国賀海岸の摩天崖（西ノ島）

- (1) ジオパーク活動とは、科学者の力も借りながら、地形・地質を含む大地の遺産の価値と意味を地元の人たちが理解し、保全する活動である。
- (2) ジオパーク活動とは、子供たちを含む地域住民や、観光客に対して、大地の遺産の価値と意味を地元の人たちが伝える活動である。
- (3) ジオパーク活動とは、大地の遺産を楽しむジオツーリズムを推進し、地域経済を持続的な形で活性化する活動である。

つまりジオパーク活動とは、地元の人たちによる主体的な活動であることを前提にして、ジオパークの保全（conservation）、教育の推進（education）、観光資源の開発（geotourism）の三者が一体となった活動である。このように考えると、この活動が地域おこし（本稿の文脈では「島おこし」）の概念と密接にかかわるものであることが理解されよう。

日本では、2009年8月に洞爺湖有珠山（北海道）、糸魚川（新潟県）、島原半島（長崎県）の3地域が「世界ジオパーク」に初めて認定された。その後、2010年10月には山陰海岸（鳥取県）が、2011年9月には室戸（高知県）が、2013年9月には隠岐（島根県）が、そして2014年9月には阿蘇（熊本県）がそれぞれ認定され、2014年12月末現在、全国7地域が世界ジオパークとなっている<sup>5)</sup>。またこの間、日本ジオパーク委員会によって日本独自のジオパークである「日本ジオパーク」が相次いで認定され、2014年

12月末現在、全国29地域が日本ジオパークとなっている（図2）。

このように、国内のジオパーク（世界ジオパーク、日本ジオパーク）はわずか数年のうちに数が大幅に増加し、ジオパーク活動が急速に活発化していることがわかる。

ところで、この間の状況について公益財団法人自然保護助成基金の目代氏は、「日本でこのジオパークが紹介されはじめた頃は、世界遺産の地質版とみられていた面もあった。しかし最近では、地域に存在する資源を活かした、地域社会の持続可能な発展を目指すプログラムとして認識されるようになり、各地のジオパークでは、世界をリードするような先進的な取り組みも行われるようになってきている。この10年にも満たない時間で内容の充実が進んだのは、各地のジオパークで活動している人や関係する研究者が、それぞれの持つ情報や経験を共有し、より良いジオパークを作るための議論を重ねてきたからだといえるだろう」<sup>6)</sup>（傍点は筆者）と指摘している。



図2 日本におけるジオパーク（2014年12月末現在）  
〔出所〕日本ジオパークネットワークのホームページにより作成。

傍点部のうち、前段の「各地のジオパークで活動している人」とは、言うまでもなくジオパーク活動を推進する地元住民たちである。前にも述べたが、地元住民が主役である点も、ジオパーク活動が地域おこしや島おこしと深い関係にあることを示している。

## Ⅱ 隠岐ジオパークの概要

### 1. 全体像

西ノ島町におけるジオパーク活動を検討する前に、「隠岐ジオパーク」の全体像をみておこう。

世界ジオパークに認定されるまで、隠岐は日本ジオパークの一つであった。他の世界ジオパークも同様であるが、隠岐もまた、世界ジオパークネットワークから認定を受ける以前には、日本ジオパーク委員会より独自に認定を受けてジオパークとなっていた。2009年、全国で8番目に認定された日本ジオパークであった。

隠岐が比較的早い段階で日本ジオパークとなったわけは、そこが文字通り日本における自然遺産（地質遺産）の宝庫だったからである。しかし、単にそれだけが理由なのではない。隠岐では壮大な自然と豊かな歴史・人文とが分かちがたく融合し、それら全体がジオパークの要件として高く評価されたからにはほかならない。世界ジオパークに登録（2013年9月）される以前の隠岐ジオパークは、経済産業省によって次のように紹介されていた<sup>7)</sup>。隠岐ジオパークの性格をよく言い表しているといえよう。



写真3 ローソク島（島後）



写真4 赤壁（知夫里島）

〔出所〕写真3・4とも『隠岐ジオパークガイドブック』より転載。

隠岐ジオパークは、島根半島の北 40 ～ 80km の日本海に点在する四つの有人島と 180 余りの無人島からなる隠岐諸島全域をエリアとしています。隠岐は、石器時代における 黒曜石の産出に始まり、北前船の風待ち港として栄えた明治 30 年頃まで、日本海交流の拠点として文化的・経済的に繁栄してきました。また、聖武天皇の時代（神亀元年、724 年）に遠流<sup>おんる</sup>の地として定められてからは、小野篁、後鳥羽上皇、後醍醐天皇が配流<sup>はいりゅう</sup>され、隠岐の文化形成に影響を与えたといわれています。

隠岐諸島は、大陸の縁辺であった時代、湖の底の時代、海の底の時代、島根半島の先端の時代と形を変えながら、今から約 1 万年前に現在のような離島となりました。それぞれの時代の証拠となる地質現象が、隠岐という小さな島で凝縮して観察できることが最大の特徴です。

隠岐のもう一つの魅力として植物の多様性があります。島の成り立ちと対馬暖流の影響を受ける地理的条件、そして島を構成する地質的要因から、北方系・南方系・高山性・低山性・大陸系・氷河期時代の生き残りの植物が共存し、北方系の植物に南方系の植物が着生して自生するなど、他の地域では見ることのできない不思議な島です。

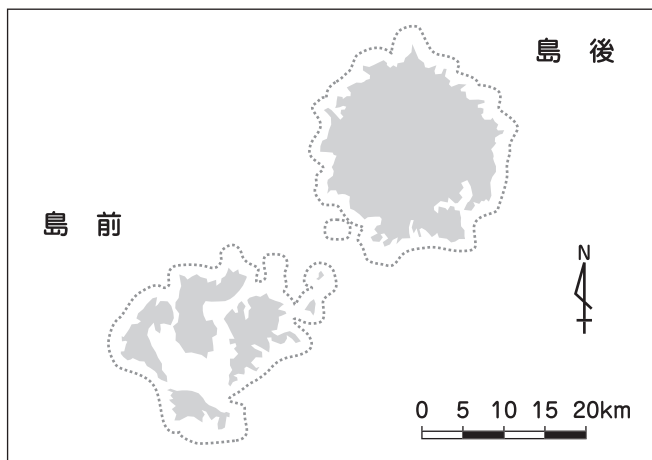


図 3 隠岐ジオパークの範囲

〔出所〕『隠岐ジオパークガイドブック』による。一部加筆。

このように、隠岐ジオパークは単に地質的要素だけでなく、多様な植生をも含む自然面全般にわたる特色と、文化・伝統的要素からなる人文面での特色とが見事に融合した「大地の公園」なのである。

また、隠岐諸島全域がエリアとなっている隠岐ジオパークは、その範囲に一部海域を含んでいる点にも大きな特色がある。すなわち、隠岐ジオパークでは海洋生物や漁業などの人の営みを含め、隠岐を取り巻く環境そのものをジオパークたる所以としているのである。このため、隠岐ジオパークの範囲は、隠岐諸島の陸域（約 346km<sup>2</sup>）と周辺海域（約 283km<sup>2</sup>= 海岸線から 1km 以内の海域面積）を足した約 629km<sup>2</sup>となっている（図 3）。海域を含めたジオパークは国内には隠岐をおいてほかになく、世界的に見てもめずらしいジオパークであるといえる<sup>8)</sup>。

## 2. 認定に向けて

隠岐ジオパークが日本ジオパークに認定された 2009 年以降、「隠岐ジオパーク推進協議会」<sup>9)</sup>が中心となって世界ジオパークへの昇格活動を展開してきた。筆者は 2010 年 10 月末から 11 月初旬にかけて隠岐を訪れたことがあるが、この時、島は日本ジオパークに認定されたばかりの喜びと、今後さらに世界ジオパークへと飛躍していこうとする機運とに満ちあふれていたように思われた。

例えば、島後・<sup>どうこ</sup>西郷港近くの「隠岐自然館」ではジオパーク関連の特別展を実施していたし、町のスーパーマーケットではジオパーク認定を記念した「隠岐ジオパーク WAON」というプリペイドカード（電子マネーの一種）を大々的に売り出し中であつた。このカードを筆者も 1 枚購入したが、カード表面には隠岐の豊かな自然や人文を象徴する何点かの美しい写真が印刷され、裏面には「『隠岐ジオパーク WAON』は、世界的にも誇れる隠岐の伝統・文化・自然環境を未来に伝えます。」という説明書きが添えられていた。このカードを持つ島民は、買い物の際にこのキャッチフレーズを目にし、今後も日々それを見ていくのであろう。



写真5 岩倉神社の乳房杉<sup>ちちすぎ</sup>（島後） 写真6 随所にみられる北方系のハマナス  
〔出所〕写真5・6とも『隠岐ジオパークガイドブック』より転載。

島を挙げたこれらキャンペーンをてこに、隠岐ジオパーク推進協議会がイニシアティブを執って、世界ジオパークの認定に向けた準備を整えていった。かくして2013年9月9日、韓国済州島で行われた第3回アジア太平洋ジオパークネットワーク会議において、隠岐ジオパークが世界ジオパークに認定されたのである。ただ、くしくもこの前日に2020年の東京オリンピック開催が決定され、国中がその熱狂に沸く最中、隠岐ジオパークのニュースがかすんでしまったのは残念であった。

### 3. 組織の構築

本稿は副題に「西ノ島町での場合」を掲げているが、以上のように、隠岐ジオパークは西ノ島町単独の活動ではない。島前・島後<sup>どうぜん どうご</sup>の4島からなる隠岐諸島全体がジオパークに認定されたのであり、島後の隠岐の島町と、島前の西ノ島町・海士町<sup>あまし</sup>・知夫村<sup>ちぶ</sup>の合わせて4か町村が連携してジオパーク活動を推進してきた。そのための組織が前述の隠岐ジオパーク推進協議会である。また、これと並行して、実働面では「隠岐ジオパーク戦略会議」<sup>10)</sup>が設立され、実質的な活動を主導してきた。

隠岐ジオパーク戦略会議は、ジオパーク活動の主体となる活動を立案して運動を牽引する役割を担ってきた。そのために必要な諸企画を立ててきたが、例えば、2012年1月には「隠岐ジオパークガイド倶楽部」を設立

している。これは、ジオパーク活動の推進には案内役となるガイドの確保と研鑽が必要不可欠との考えに基づくもので、①ガイド相互の親睦を深めるとともに、②研修会等でスキルアップを図り、③研究成果等最新情報のキャッチアップが図れることを目標にしている。

また、この隠岐ジオパークガイド倶楽部の存在は、島根県が主導する「新しい公共の場づくりのためのモデル事業」に応募するための骨子の一つともなっている。県に提出したその企画案は、「ツアーコーディネーター養成による新たな観光形態と収入機会の創出」という事業名で高い評価を得て採択された。島根県資料によれば、この事業は概略次のような内容である。(表1)

表1を見てわかるように、Aの「自主財源確立に資する事業」とBの「ガイド協会機能の育成に関する事業」とを骨子にしており、両者には不可分な相補性がある。Aは財源確保に資する事業であり、Bは隠岐ジオパークの魅力を旅行者などに伝えるための事業であるが、Aの裏付けがあって初めてBが可能となり、Bの進捗がAをさらに手助けするといった関係にある。また、A・B双方を通じてソーシャルメディアの活用に力点が置かれていることも大きな特色といえよう。

以上を骨子とする、隠岐諸島4か町村が一丸となったジオパーク活動により、隠岐は世界ジオパークの認定へとこぎつけることができた。そしてその後も4島は連携して活動を推進してきたのである。

4島連携によるジオパーク活動を通じての西ノ島町の島おこしは、概ね表1の内容に即して展開されてきた。そして世界遺産に認定された2013年9月以降においても、基本的にはこの方向で推進されてきたといっていよい。なお、ここで人的要素に注目すると、注9)・10)でも指摘したように、隠岐の島町出身のリーダーたちに負う所が少なくない。その意味で、西ノ島町のジオパーク活動は、隠岐の島町のイニシアティブのもとに展開されてきた面があるといえるかもしれない。

表1 「ツアーコーディネーター養成による新たな観光形態と収入機会の創出」

事業	項目	内容
概要		申請中の世界ジオパークネットワークへの登録に向けて、隠岐ジオパークを運営する中核的役割を担う組織および人材の育成と、組織の理念、活動状況等を情報開示するとともに、継続的な活動を担保するための寄附付き商品の開発等を通じたファンドレイジングへの取り組みを実施する。隠岐ジオパークガイド倶楽部を設立し、ガイドのスキルアップと収入機会の創出を図る。
A 自主財 源確立 に資す る事業	①ソーシャルアプリの 開発・販売  ②ファンドレイジング に関する勉強会  ③会計情報等の公開  ④隠岐ジオパークファ ン倶楽部の会員募集	<ul style="list-style-type: none"> <li>・寄附付きソーシャルアプリ（隠岐の神社図鑑）の開発・販売</li> <li>・金額のうち一定額をジオパークの資源保全に充当</li> <li>・組織運営に関する会計情報等適正な運営状況を島根県のポータルサイトなどに公開</li> <li>・隠岐に来たことのある顧客に対して隠岐ジオパークファン倶楽部会員を募集</li> <li>・会報誌を発行し、隠岐ジオパークの情報を発信</li> </ul>
B ガイド 協会機 能の育 成に資 する事 業	①ツアープログラムの 造成  ②認定ガイド制度の導 入  ③ソーシャルメディア を活用した情報発信	<ul style="list-style-type: none"> <li>・旅行代理店を交えた魅力的なプログラムの造成</li> <li>・旅行者ニーズ等についての研究会の開催</li> <li>・四季に応じた体験学習型メニューの造成</li> <li>・雨天時に楽しめるメニューの造成</li> <li>・知識・ガイドスキル等に基づく有償ガイド基準の検討</li> <li>・評価および判定基準の検討</li> <li>・認定ガイドのプログラムの検討</li> <li>・有償ガイドの育成</li> <li>・フェイスブック・ツイッター等のソーシャルメディアを活用した情報の発信</li> <li>・共感・支援の環を広げるためのツールとしての活用</li> </ul>

〔注〕島根県「新しい公共の場づくりのためのモデル事業」で採択された、隠岐ジオパーク戦略会議提出の企画案を要約。

〔出所〕島根県のホームページにより作成。

### Ⅲ 西ノ島町での取り組み

#### 1. 牧畑との複合（ジオパークの保全）

西ノ島町独自の活動という面からは、歴史遺産である牧畑との複合を指摘することができる。これは、前述したジオパーク活動の定義にしたがえば、「ジオパークの保全」の一環としてとらえることができよう。

ところで牧畑とは、「牧」と「畑」とが一体となった農牧地、もしくはその農牧地で行われる農牧形態のことで、土地がやせた島嶼部などを中心に、遅いところでは昭和40年代初頭頃まで見かけられた。隠岐諸島（ことに島前）は全国でも最も遅くまで牧畑慣行が残存した地域の一つであり、中でも西ノ島と知夫里島で牧畑遺構が現在も数多く残されている。

このように、牧畑もまた西ノ島町独自の生業ではないが、ことに西ノ島や知夫里島において今日もなお、その痕跡が明瞭に認められることは、これらの島々が牧畑を媒介したジオパーク活動と最も密接にかかわっていることを示唆している。筆者はかつて拙稿の中で、牧畑とジオパークとの関連について次のように指摘した<sup>11)</sup>。

隠岐には、西ノ島の「摩天崖」や「通天橋」といった壮大な自然の造形、赤・黄・茶色など色とりどりの断崖が続く知夫里島の「赤壁」、荒波に侵食されて柱状に佇立する「ローソク島」、そして悠久の時を経て今に生きる島後の「乳房杉」や「かぶら杉」など、まさに「ジオパーク」を思わせる数々の大地の遺産がある。

いっぽう、隠岐の牧畑は直接的にはこの定義とは無関係に思えるが、その営為のすぐ足下には「摩天崖」や「通天橋」や「赤壁」といった大自然の造形が広がっていた。また、その土地利用にみる合理性と秘められた知恵は、ジオパーク活動の理念とも一脈通じるものがあった。牧畑を、「壮大な大地で、畑作と牛馬の飼育とを組み合わせる生活の糧を得るとともに、大地を育み、その生態系を保護する活動」と定義するなら、牧畑とジオパークの理念とはかなりの程度重なり合うようにも思われる。



写真7 牧畑を画したアイガキ（西ノ島） 写真8 雑灌木が茂る草地（西ノ島）

また、島前には「牧畑を後世に伝える会」というものがある。これは現在放牧を行っていない、一般島民による任意団体であるが、牧畑の価値を明らかにし、広く社会に発信していくための諸活動を行っている。具体的には、牧畑時代に整備された石垣（アイガキ）を発掘したり、垣沿いの雑灌木の伐採等のボランティアを組織したりという活動を実践する。自然を愛し、土地の伝統と遺産を守るこれらの活動も、ジオパーク活動の理念に相通じるものがあるだろう。

上の文章を執筆したのは2010年末から2011年初頭にかけてであって、隠岐はすでに日本ジオパークとなっていたものの、世界ジオパークにはまだなっていないという時期であった。この時期、島前・島後の4島を限なく歩いた者の感想として、かつての牧畑を介したジオパーク活動、換言すれば、牧畑という歴史遺産の保全意識を最も強く感じさせたのがこの西ノ島（西ノ島町）であった。

上記文中にある「牧畑を後世に伝える会」は、西ノ島町を主体に活動する会であり、この島において牧畑保存の取り組み、ひるがえって、牧畑を介したジオパーク活動が最も熱心に行われていたといえる。かくして、西ノ島町での牧畑の保存・復元への取り組みもその重要な一要素としながら、2013年9月、めでたく世界ジオパークの認定へと結実していったとみることができよう。

## 2. フォーラムの開催（教育の推進）

世界ジオパーク認定後、西ノ島町が最初に取り組んだ企画が「平成 25 年度 牧畑フォーラム」であった。これは、前述したジオパーク活動の定義に従えば、「教育の推進」の一環としてとらえることができる。

このフォーラムは、表題に年度を掲げていることからわかるように毎年開催されているもので、世界ジオパーク認定以前からも続けられてきた。その中で平成 25 年度（2013 年）は、世界ジオパーク認定を記念して「地域づくりに生かす<sup>ぶ</sup>夫の精神とジオパーク」<sup>12)</sup>をメインテーマに、同年 12 月 7 日に実施された。ここに筆者は基調講演者兼シンポジストとして招かれ、「コミュニティづくりと牧畑」という演題で基調講演を行った。地域づくり、換言すれば島おこしと、ジオパーク活動とがいかに密接にかかわっているかをテーマにした勉強会であった。

なお、シンポジストには筆者のほか、隠岐ジオパーク推進協議会から野辺一寛氏（隠岐の島町在住）、牧畑を後世に伝える会から口村光房氏（西ノ島町在住）、西ノ島町観光協会からニュージーランド国籍のニコラ・ジョーンズ氏（西ノ島町在住）の 3 名が出席し、多くの島民を集めて活発な議論が交わされた。なお、会の様子は地元紙（山陰中央新報）によっても報道された。手前味噌で恐縮ではあるが、一つの資料として以下に掲載する（資料 1）。

基調講演での筆者の話は概略以下のような内容であった。聴講者の関心は高く、多くの質問や感想が寄せられた。

- ① 隠岐における牧畑の成立は 12～13 世紀頃のことであるが、ほぼ同時期、ヨーロッパでは「三圃式農法」が定着したこと。牧畑は 4 年サイクルを基本とする農牧輪転農法であるが、そのしくみが三圃式農法によく似ていること。両地域の土地条件の悪さが、偶然にも、それぞれ別個に類似の農法を招来せしめた可能性があること。

## 隠岐・島前で行われた「牧畑」

## 資源循環 自然利用の知恵

### 西ノ島でフォーラム



牧畑の歴史的価値について意見を交わす出席者(左)

隠岐・島前に1970年ごろまで残っていた牧畜と畑作を組み合わせた農業「牧畑」を考えるフォーラムが7日、西ノ島町内であり、約60人が専門家の意見を聞きながら、牧畑の歴史的価値や背景にある助け合いの精神を学んだ。

### 歴史的価値、精神学ぶ

「資源を内部で循環させるなど自然を利用する知恵があった」と評

牧畑は牛馬の放牧と、麦、ヒエ、アワなどの耕作を4年周期で輪転する世界的に珍しい農業の形態。現在公共農舎として名残をどめいている。

フォーラムは町立中央公民館などが主催。牧畑を研究する近畿大学総合社会学部の戸井田克己教授が、隠岐に牧畑が生まれた理由や価値づけなどを説明。

活動を通して島前に活気があった。今も牛馬の餌場の生産地として役立っている」と指摘。町観光協会職員は「ニカラ・ジョーンズさんは、隠岐諸島が世界ジオパークに認定されたことを受け「牧畑の跡地がある」鬼舞屋望台の周りを紹介したい」と話した。

また、牧畑の運営は島内の住民が団結する「天の精神」が必要で、こうした互助精神を現代に受け継ぐべきだという意見があった。

資料1 牧畑フォーラム（西ノ島町）を伝える新聞記事

〔出所〕「山陰中央新報」2013年12月8日付けによる。

- ② 牧畑慣行は島後でいち早く衰退し、島前で遅くまで残存（昭和40年代初頭頃まで）したこと。現在牧畑は残っていないものの、広大な「公共牧野」としてその慣行が維持されており、西ノ島での面積は約2,300haと4島中最大であること。
- ③ 西ノ島には貴重な「島の財産」があり、それを島おこしに生かせること。その財産とは、大自然の造形のほか、豊かな歴史・文化も該当すること。それらの要素はさまざまなツーリズム（グリーンツーリズム、ブルーツーリズム、ジオツーリズムなど）に役立てることが可能であり、これはジオパークの理念とも重なり合うこと。
- ④ 「島の財産」を生かしたジオパーク活動は、コミュニティづくりにも

有益であること。それには牧畑の精神をたつとび、牧畑からの学びを大切にすることがヒントになること。牧畑とは、持続可能な自然利用の知恵であるとともに、南洋や朝鮮半島との文化交流の成果でもあり、今後の国際交流にも無縁ではないこと。

午後からのフォーラムに先立って、午前中にはバスを利用した「牧畑現地見学会」が開催された。この見学会では牧畑の遺構と現在の公共牧野の様子を視察するとともに、現地で関係者からの解説を聞いて知見を広めることを目的とした。参加したのはおもにボランティアガイドを務める島の人たち、すなわち前述の「隠岐ジオパークガイド倶楽部」に所属する西ノ島町在住の人たちであった。

島のボランティアガイドには首都圏など遠方からIターンした人も少なくなかったが、案内役を務めたニコラ・ジョーンズ氏もまた、西ノ島の大自然の魅力に取りつかれ、長駆ニュージーランドからやってきた、筋金入りのIターン者である。地元の人とIターンした人々が協力し、牧畑を介したジオパーク活動に取り組んできた。



写真9 牧畑現地見学会の様子（西ノ島）



写真10 島前カルデラの展望（西ノ島）

### 3. 歴史遺産の活用（観光資源の開発）

隠岐諸島の島々はどれもそれぞれに多くの歴史遺産を有しているが、西ノ島もまたその例外ではない。隠岐ジオパークの場合、地形的・地質的要素だけでなく、文化的・伝統的要素も重要な構成要素となっていることから、これらの歴史遺産を活用した観光誘致も「ジオツーリズム」の範疇に含められる。前述したジオパーク活動の定義にしたがえば、「観光資源の開発」の一方途として歴史遺産の活用をとらえることができる。

西ノ島でジオツーリズムに活用できる遺産として、例えば以下のような要素を挙げることができる。

#### 牧畑遺構と牛競り

前述したように、牧畑という営為はジオパークの理念とも密接に結びついている。それがもたらした牧畑遺構の多くは、今後長く保存されるべき歴史遺産であり、観光資源としても価値を有していよう。しかし、中には傷みの激しいものもあり（写真7）、島の記憶を後世に語り継ぐためにも補修が必要である。

牧畑は現在減んでしまったが、前述したように、「公共牧野」に名を変えて牧畜が盛んに行われている。2009年度における西ノ島町では、40戸の畜産農家が620頭の親牛を飼育し、412頭の子牛を出荷した（JA 隠岐どうぜんの資料による）。子牛はおもに京阪神各地に出荷され、出荷先でさらに大きく肥育されたのち、「神戸牛」や「松坂牛」などのブランド肉となって全国各地に出荷されている。

その牛競りが3月・7月・11月の年3回、西ノ島（西ノ島町）・中ノ島（海士町）・知夫里島（知夫村）にある競り市を巡回して行われている。それはあたかも島前の年中行事となっており、牧畑の歴史的慣性をいまに伝えている。牧畑遺構と牛競りは隠岐ジオパークにおける「生業遺産」なのである。



写真 11 牛競り（知夫里島）



写真 12 三度のトド塚（西ノ島）

### アシカ猟の記憶

隠岐はかつてアシカ猟<sup>13)</sup>の盛んな土地だった。島内各地でアシカを捕獲したほか、竹島にも出漁して生きるためにその糧を得た。竹島はアワビやサザエ、ワカメなどの海藻類の宝庫だったが、何よりも重要だったのはアシカの存在だった。竹島に近い島後を中心に、隠岐一円から漁民が集い、定期的に竹島へと出漁していた。

アシカの肉は脂肪が多く、それを搾ってランプの油としたほか、毛皮は敷物やカバンの材料として、肉の搾りかすは畑の肥料として余すところなく利用した。また、子アシカは生け捕りにして動物園などに高価で売られた。隠岐島民にとって、アシカ猟は生きてゆくための欠くべからざるすべの一つだったのである<sup>14)</sup>。

西ノ島では、島西部の三度<sup>みたべ</sup>の集落がアシカ捕りで知られていた。集落北の矢走<sup>やはし</sup>の洞窟<sup>15)</sup>に棲むアシカを、「カンコ舟」という手漕ぎの小舟を使って捕獲した。寺の境内にはアシカ供養の「トド塚」があり、往時の記憶を伝えている。

### 黒木御所跡

黒木神社の中にある後醍醐天皇の行在所が黒木御所で、その跡地が残されている。後醍醐天皇は元弘の変（1331 年）で鎌倉幕府に破れ、西ノ島に遠流された。ここを脱出するまでの約 1 年間、この行在所でお過ごしになったといわれる。石碑の立つわずか十数坪の狭い跡地のあり様は、天皇の不遇な時代を偲ばせる。

「黒木」とは皮を削っていない生の木材のことで、それを用いて建てた天皇の御所が「黒木御所」である。日本語の語彙としても、自然のまま、あるいはそれに近い状態を「黒」と表現することがあり、それと同じく手をかけていない粗末な在所というニュアンスである。後醍醐天皇の行在所はここと、国分寺の2説あるが、黒木御所跡には天皇にまつわる伝承が残っており、この場所が文化遺跡に指定された。

隠岐では、配流された天皇や上皇の記憶が身近にあったことから、島民にある種のプライドが熟成され、風土を愛する意識が育まれた。そうした観念が島の文化形成にも影響し、ジオパーク活動に結びついたと考えられよう。

#### たくひ 焼火神社

島の最高峰・焼火山（452m）の8合目ほどに鎮座する旧県社で、航海安全の守護神としてかつては遠く三陸海岸にまで信仰を集めた神社である。本殿・通殿・拝殿からなる社殿は国の重要文化財に指定されている。写真14で、左奥に見える本殿は大きな一枚岩をくりぬいて建てられおり、この社もまた、ジオパークを構成する重要な要素に関係している。

「たくひ」という神名は、承久の乱により隠岐（中ノ島）に配流された後鳥羽上皇が、隠岐に渡る途中、夜になって方向知れずになったために祈願をすると、たちどころに御神火が現れてそれを目当てに無事到着できたという故事にちなむ。爾来、日本海を航行する船乗りたちから海上安全の神と崇められ、ことに北前船の船頭からの信仰は篤かった。



写真13 黒木御所跡（西ノ島）



写真14 焼火神社（西ノ島）

焼火山は付近の海のどこからでも望むことができ、神社の御神火はあたかも灯台の役目をした。それは単なる象徴としての航海の守護神ではなく、実効力をともなった船の守り神だったのである。ちなみに、隠岐汽船の社章は三つの赤い丸が正三角形に配置されたものだが、これらの丸は三つの御神火をシンボライズしたものといわれている。

### 由良比女神社とイカ寄せの浜

由良の浜に面して鎮座する隠岐国一宮で、灯籠や拝殿の欄間などにイカの彫刻がほどこされており、イカとの強い結びつきをうかがわせる神社である。由良の浜には毎年10月から翌2月頃にかけて付近にスルメイカの大群が押し寄せるので、通称「イカ寄せの浜」とも呼ばれ、浜の名としてはこちらのほうが有名である。

浜に大量すぎるほどのイカが打ちあげられるので、「釣る」のではなく、かき集めるようにイカを「拾った」。知夫村の伝承では、本来知夫村のイカ浜にあった当社が対岸の由良に移ってからは、イカはもっぱら由良の浜に集まるようになったという。知夫里島であれ西ノ島であれ、島前湾の狭い海峡めがけて集まってくるのはイカも北前船も同じで、海の狭隘部がもたらす科学的な現象といえよう。

筆者が島を訪れた2013年12月にも、浜辺で小学生たちが垂れる釣り糸に面白いようにスルメイカがかかっていた。由良の浜は今なおイカ寄せの浜であり、由良比女神社はその守護神である。



写真 15 由良比女神社の灯籠（西ノ島）      写真 16 イカ寄せの浜（西ノ島）

以上、ジオツーリズムを進めるうえで活用できる歴史遺産のいくつかを紹介した。これらの遺産と、国賀海岸や通天橋などの自然遺産とが結合して、さらに島独自のユニークな植生などあいまって、隠岐ジオパークを構成している。ジオパーク活動では、これらの財産を活かしたジオツーリズムの創出によって、島の魅力を伝えていきたい。それには観光面からの条件整備だけでなく、それら資源の保全や、資源の希少性・重要性の理解を啓発する教育活動との連携が重要になってくる。

#### Ⅳ 海士町が存在

島前湾を挟み、すぐ隣の中ノ島には海士町がある。海士町は、離島であるにもかかわらず、全国の地域おこしの優等生としてしばしばマスコミに登場するほどの自治体である。その存在は間接的に、あるいは直接的にも、西ノ島町の島おこしに少なからぬ影響を与えてきたように思われる。

海士町のリーダーは町長の山内道雄氏<sup>16)</sup>である。海士町では、同氏が強力なリーダーシップを発揮して経済の活性化を図り、これまで相当の成果を上げてきた。筆者は2010年11月に山内氏が営む民宿「A 荘」に客として逗留し、町役場にも足を運んで直接話を聞いた。

話の中で最も印象的だったのは「合併はしない」という強い決意である。島を訪れた前夜ともいえる、2004年頃からの数年間は「平成の大合併」の真ただ中にあり、現在は隠岐の島町となっている島後の4か町村（西郷町・布施村・五箇村・都万村）もこの時合併している（2004年10月）。当時、島前でも合併協議が進められており、全国多くの自治体になぞらえれば合併しても不思議ではないケースであったが<sup>17)</sup>、ここ島前では結局3か町村（海士町・西ノ島町・知夫村）は独立独歩の道を選んだ。

山内町長は、「合併のメリットはなく、あるのは財政面でのデメリットだけだ」という趣旨のことを言っていた。「自分は「海士町」の名を残したいのだ」とも言っていた<sup>18)</sup>。これらのことから、島前地域全体にかかわるこの決断に山内町長の意思が強く反映されたように思われる。かくして島前3

島はその後単独自治体のかたちを維持したが、これは文字通り、西ノ島町におけるその後の島おこしにとって直接的な影響を与えたことを意味している。

山内氏の著書<sup>19)</sup>によれば、財政的・人的に困難をきわめた離島（かつての海士町もその例外ではない）の生き残りには、次の10か条が重要である。

- ① あえて単独での道を選ぶ
- ② 民間の感覚と発想で危機に対する
- ③ 意思は言葉ではなく行動で示す
- ④ 「守り」と「攻め」の両面作戦
- ⑤ 「島をまるごとブランド化」戦略
- ⑥ 誰もができないと思ったことをやる
- ⑦ 人が変われば島は変わる
- ⑧ 活性化の源は「交流」
- ⑨ 答えは常に現場にある
- ⑩ ハンディキャップをアドバンテージに

10か条の中には文言を見ただけでは内容の見えにくい抽象的なものもあるが、一目で中身のわかるキャッチフレーズもある。「島をまるごとブランド化」というフレーズ（⑤）や、「人」「交流」などといったキーワード（⑦・⑧）がそれである。実際、海士町では島外から多くのIターン居住者<sup>20)</sup>を誘致したり、島独自の商品<sup>21)</sup>を積極的に開発したりしてきた。独自商品はインターネットを活用し全国にPRしては顧客を獲得し、通信販売によって販路を拡大した。顧客となった人たちの中には観光客として海士町を訪れる人もおり、それでまた島に金を落とした。前述のように、中にはIターンする人も少数ではなかった。これら一連の取り組みがうまく循環し、海士町を苦境から救い出していったのである。

西ノ島町にとって、すぐ隣にある海士町の「お手本」がかえって負担と

なったことは想像できる。真似しようにもすぐできるわけもなく、二番煎じでは効果も限定されよう。そうする中での世界ジオパークだったのである。西ノ島町の島おこしにとって、海士町が存在が間接的に、ジオパーク活動をより大きなものたらしめる役目をはたしたといえるのではなかろうか<sup>22)</sup>。

## V むすび

本稿では島根県隠岐郡西ノ島町を事例にして、特にジオパーク活動という、近年注目を集めている事象を通じての離島活性化のための一つの方策について考えてみた。隠岐ジオパークが隠岐諸島全域を対象にしたものであることから、その活動は自然、隠岐諸島全体が連携したものとなっている。その主体は隠岐ジオパーク推進協議会や隠岐ジオパーク戦略会議といった組織が担ってきた。これらの団体はたまたま島後に在住する指導者たちがイニシアティブを執ったこともあり、活動は島後主導で進んできた感がある。

一方島前では、従来から地域おこしを先導した海士町という傑出した存在があったこともあり、西ノ島町ではかえって島独自の取り組みであるジオパーク活動に力が入れられてきた。それは「大地の遺産」の保全と、それを推進するための教育、そして財源確保や島外者への啓発を旨とした観光開発が有機的に関連し合ったものだった。ことに西ノ島町では「牧畑を後世に伝える会」が主体となった保全活動や、「牧畑フォーラム」といった教育・啓発活動に大きな特色があった。人文的な歴史遺産である牧畑を豊かな大自然の保全と結びつける活動、またそこに数々の史跡を結びつける活動が、西ノ島町におけるジオパーク活動の中核となっている。

これらの活動の成果として、西ノ島に魅力を感じて島を訪れる観光客が一定数誘致できていることはもちろん、中にはIターンして島に住みつく人を吸引している。それは対岸の海士町と比べればまだ限定的であるものの、そうした人たちがガイド役を務めてより多くの外来者に島の魅力を伝

えている。

ジオパーク活動の主眼の一つに持続可能な社会と経済を育むことがあった。究極の限界集落といえる離島を崩壊の魔の手から救うためにはあらゆる策が講じられる必要があるが、その有力な手立ての一つにジオパーク活動がある。人材確保と財政改善に寄与しうるジオパーク活動は、全国各地の過疎地において可能性ある地域おこしの手段である。そしてとりわけ、自然豊かな離島においてより大きな切り札となる可能性を秘めている。

#### 注および文献

- 1) 「島おこし」という語は、高度経済成長期に出現した「地域おこし」という語から派生したものとみられるが、当の「島おこし」はそれがいつ頃から使われるようになったかを特定するのは難しい。

語源になった「地域おこし」については、「地域活性化」や「地域振興」あるいは「地域づくり」などといった語とはほぼ同義であり、その意味は、「地域（地方）が、衰えた経済力や人々の意欲を向上させたり、人口を維持したり増やしたりするために行う諸活動」（ウィキペディアの「地域おこし」の項による）と定義される。

その「地域おこし」は、町の場合には「町おこし」や「町づくり」、村の場合には「村おこし」や「村づくり」などとも呼ばれてきたが、これらの概念が離島へと波及していく中で「島おこし」という語が徐々に定着していったものと考えられる。ちなみに、総務省の地域自立応援課では「地域おこし協力隊」という事業を推進しており、町おこし・村おこし・島おこしなどすべての概念を包括する語として「地域おこし」を用いている。

- 2) 渡辺真人（2008）：「動き始めた日本のジオパーク活動」、地理、53-9、p.26
- 3) 事務局は産業技術総合研究所地質調査総合センターが担当。なお、同研究所は旧通商産業省と現経済産業省から分離して発足した独立行政法人である。
- 4) 日本ジオパーク委員会のホームページによる。
- 5) 日本ジオパーク委員会によれば、2014年8月の時点において、世界30か国・100地域が世界ジオパークに認定されている。
- 6) 目代邦康（2014）：「市民と科学をつなぐ場としてのジオパーク」、地理、59-12、p.12
- 7) 経済産業省のホームページ（当時）による。
- 8) 隠岐ジオパーク推進協議会編（2012）：『隠岐ジオパークガイドブック』、隠岐ジオパーク推進協議会、p.3
- 9) 世界ジオパーク認定当時の会長は松田和久氏（隠岐の島町長）、現在の会長は八幡浩二氏。現会長の八幡氏は、ジオパークの所以の一つともなった黒曜石の加工・販売を手掛ける黒曜石研究の専門家、父は日本固有の離島・竹島の語り部として著名な八幡昭三氏

である。

- 10) 設立は2011年9月。会長は隠岐ジオパーク推進協議会会長の八幡浩二氏（隠岐の島町）が務めるが、副会長には西ノ島町および海士町在住の関係者がそれぞれ選出されている。
- 11) 戸井田克己（2011）：「隠岐の自然と生業―牧畑のその後を中心に―」、民俗文化、23、pp.166-167
- 12) 西ノ島をはじめとする島前地域では古くより相互扶助の意識が強く、当地ではそれを「夫」と呼んできた。「夫役」の夫と考えられ、古代には課税を意味したが、近世以降には労役の意味に転じた。全国的には「結」という言葉で知られる、共同作業を旨とする労働慣行と同様の概念であったと思われる。
- 13) 厳密には日本の固有種であるニホンアシカ。ニホンアシカは日本沿岸および近海に生息したアシカの一種で、体型はアシカよりも大きく、俗に「トド」と呼ばれることも多かった。回遊性はなく、同じ場所に周年棲息する習性があるといわれる。すでに絶滅したという説もあるが、韓国がこれを不法奪取した1952年時点では少数ながらまだ棲息していたともいわれる。
- 14) 戸井田克己（2014）：『聞き書き 竹島の記憶』、近畿大学総合社会学部紀要、3-2、pp.1-16
- 15) 海に面して20余りの洞窟があることから、「矢走二十六穴」といった。現在は観光船の島めぐりルートにもなっていて、これらの洞穴自体がジオパークを構成する自然の造形である。
- 16) 1938年海士町生まれ。海士町議、同議長を経て、2002年に海士町長に初当選した。筆者が面会したのは2期目の終盤にあたる時期で、現在3期目を務めている。本土の民間企業での経験を生かした大胆な行財政改革と、産業創出策の推進者として知られる。島根県離島振興協議会会長、全国離島振興協議会副会長を歴任。
- 17) 三つの島に分かれている点で島後と異なるが、海士町には島前唯一の高校である島根県立隠岐島前高校があり、高校進学を通じて必然的に3島民が往来し交流が深められる。つまり、島前湾に隔てられてはいるものの、町村合併の前提条件となる3島間の一体性は十分備わっているといえる。なお、島前湾内を連絡船「いそかぜⅡ」が頻繁に行き来しており、交通面での一体性も高い。
- 18) これらの思いは、町長の名刺がよく物語っている。その長い肩書には、「隠岐國海士町長 経営方針 自立・挑戦・交流～そして人と自然が輝く島～」とある。「隠岐國」という枕詞と「海士町」という歴史や観光を想起させる固有の町名とがうまく結びついている。また、「自立・挑戦・交流」というフレーズも海士町の強い決意を表しているように思われる。
- 19) 山内道雄（2007）：『離島発 生き残るための10の戦略』、NHK出版、203p
- 20) 海士町のIターン居住者が相当数に上ることはマスコミでも報道されているが、正確な数字は持ち合わせていない。ただ、町長との面会の中で有能な若い町職員を何人も紹介されたが、その多くが関東などからIターンしてきた人ということであった。このことから、島内外の多くの人材が海士町を支えていることが理解される。

- 21) 例えば、「ふくぎ茶」などの農産物や、岩ガキなどの海産物など、数多くの独自商品が開発され、ブランド化されている。このうち「ふくぎ茶」は島に自生するクロモジを使ったお茶で、「島のハーブティー」と銘打って販売されている。岩ガキは養殖ものだが、公共牧野から風に乗って飛んでくる牛馬糞のかすが餌となって良質な岩ガキを育てるのだという。また、海士町では牛を子牛の段階で出荷せずに、成牛まで育てて「隠岐牛」のブランドで出荷する取り組みも進められてきた。子牛出荷とブランド牛肉の出荷とでは付加価値に大きな違いが出る。
- 22) ジオパークの素材という観点でみると、海士町（中ノ島）は隠岐4島中で最もめぐまれない島であるといえる。島内には後鳥羽上皇にちなむ史跡はあるものの、文字通り「大地の公園」と呼べる自然的景観には乏しい。一方で、西ノ島町（西ノ島）の国賀海岸は隠岐諸島を代表する第一級の景勝地であり、隠岐汽船のフェリー名にも「くにが」が使われている（なお、隠岐汽船のフェリーにはこのほか、隠岐諸島全体を指す「おき」、島後の景勝地に由来する「しらしま」がある）。

#### 付記

本稿の作成に当たっては、本文中にお名前を記した方々のほか、特に西ノ島町教育委員会社会教育主事の元上治氏にお世話になりました。記して感謝の意を表します。